



## 京都モノ銘品がたり— ⑱

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかくれた物語をご紹介します。

日本が世界に誇る岡山県のデニムに施す京友禪。ポケットや裾を折り返した部分の絵柄がアクセントになっている。

# 京都デニム

雅な文化と共に1000年を歩み、匠の技が今なお受け継がれている京都には、新たな形で伝統工芸を発信する職人が多い。これまでに紹介してきた職人のなかには先代から代替わりして奮闘する若手も多く、培った技を礎にデザインをモダンに変えて若者を取り込んだり、海外に発信したり、伝統と革新を続けている。従来のやり方だけに留まらない、驕らず挑戦する姿勢こそが、今日に残る京都の伝統工芸を支えてきたと言えよう。

一方で時代と共に需要が減り、職人の高齢化が進み、業態を変えざるを得ない店があったのも事実だ。いわゆる「糸へん業界（繊維業界）」もそのひとつで、京都における呉服はまさにこれに当たる。

京都デニムの前身は、江戸中期より営んでいた着物の白生地商・桑山商店であった。その後、染色加工も請け負うことになり、染物屋として多くの職人を束ねて染めや京友禪を施したフォーマルな着物を

手がける製造メーカーに。桑山豊章氏に代替わりしたタイミングで、京都の染色技術を新しい形で表現する方向へと転換した。

### デニムに京友禪を施す

京友禪は言わずと知れた伝統工芸であり、美しい染めの技法である。通常、白生地に絵を描いて染められる友禪を、デニムに施すのは非常に困難。なぜなら、すでに藍染されているデニム地は、色を抜く「<sup>ぼっせん</sup>抜染」をしてからでないと友禪を描き入れることができないからだ。

型染抜染はまず、デニム生地に染め型を置き、抜染糊を載せるところから始まる。染め型の多くは、絵柄を彫った和紙にカシューといわれる油性の漆塗料が塗ってあるもの。型の上に乗せた抜染糊をヘラで均一に伸ばして時間を置くのだが、デニムの生地によって置く時間が異なる。また、季節や気温も考



型をはがすのは神経を使う作業。抜染糊は段差の部分 considering 置かなければ、抜け方に差ができる。



染物屋時代から職人の技を間近で見っていたこともあり、独学で友禪染の技法を習得。伝統を重んじながら新しい挑戦を続けている。



季節の花や柄デザインが多いが、絵柄はオーダーも可。男性には家紋や龍が人気がある。



秒単位の動きが求められる洗いの作業。抜染糊を置く時間が短く青みが残った場合は、考慮して色を挿さなければならない。

デニムパンツのほかにも小物が充実。ネクタイやブックカバーは手ごろだ。



京都駅から徒歩圏内の店舗にはメンズ、レディース、キッズの商品が揃う。

慮せねばならず、とくに湿度の影響を受けるため糊の固さの調節もしなければならない。経験に基づく職人の勘が求められる、非常に重要な工程だ。

抜染糊を洗い流すのにも神経を使う。他の生地に糊が付かないよう、そっと型紙をはがして湯で流すのだが、流しながらバケツの湯を一気にかき回さなければならない。これは、流した際に薄まった糊がほかの生地に付着するのを防ぐため、わずか2秒で色が抜けてしまうという。また、抜染剤は弱アルカリ性で、そのまま置いておくと生地が破れてしまうため、洗い流す際には中和剤を入れる。「最初のころはよく生地が破れてしまいました」と桑山氏。試行錯誤のすえ、抜染の技を確立させた。

型染抜染が終わると色挿しの工程へ。薄い色から濃い色の順に重ね、物によっては先に水を塗ってから色を挿すこともある。すばやく色を塗らないと水分が染み出てしまい、まわりに色が散ってしまうた

め、手数を少なく色を挿していくことが求められる。

### 京都デニムを技の名称に

「伝統工芸をリアルクローズに取り入れたかった」と語る桑山氏は、型紙づくりから、抜染、京友禪を手がけている職人。「着物は古くなると傷んで価値が下がってしまうが、デニムは風合いが味となる。そこに合わせられる京都の伝統工芸の技法を探しました」。刺繍や西陣織など色々試し、日常着として強度に問題のなかったものが、友禪、組紐、小紋染めだった。「若い人には着物や浴衣に触れる前に、京都デニムを通して伝統工芸のすばらしさを知ってほしい。ゆくゆくは「京都デニム」が店名ではなく技法となり、産業になってほしい」。試行錯誤の連続で発展途上にある京都デニムは、これから京都の伝統工芸を担っていく存在の一つになるのだろう。

(取材協力/京都デニム) [kyoto-denim.jp/](http://kyoto-denim.jp/)